

Bonnie Kent: *Virtues of The Will*—*The Transformation of Ethics in the Late Thirteenth Century*—

C. U. A. Press, Washington, D. C., 1995, pp 270.

八 木 雄 二

すでにいくつかの雑誌に発表された論文を含むこの著作は、13世紀末の四半世紀に起きたアリストテレス倫理学の事実上の変貌を明らかにしようとする意欲的で、なおかつ、堅実な研究のまとめである。トマス倫理学がかなりの程度アリストテレスに忠実であり、これに対してスコトゥスのものがむしろカントに代表される近代の倫理学（規範主義）に近いものを持っていること、この変化を引き起こした時代が1270年の禁令ののちにあるらしいこと、等はすでにぼんやりとながら諸研究者が指摘している。加えてマッキンタイアーの『美德なき時代』（MacIntyre, *After Virtue*, 1981. 邦語訳みすず書房, 1993年）は、古典古代の美德の概念が中世に受け取られながら変貌し、近・現代の倫理学上の問題を引き起こしていることを、新しい視点を折り込みながら現代の研究者を説得している。

著者ケントは、このマッキンタイアーからも多大な刺激を受けたことを率直に語りつつ、マッキンタイアーのトマス解釈の誤りに修正を施すことでトマス倫理学の事実を確認し、そしてさらにスコトゥスの説が直接に基づいている Henricus of Ghent, Walter of Bruges, William de la Mare, Peter Olivi 等の説を検討しながら「変貌」の実態を明らかにしようとする。まず著作に則して目についた点を取り上げて概説しよう。

第1章では、ジルソンとシュテンベルゲンのスコラ史解釈が検討され、この時期を「アウグスチヌス主義の復興」と理解することについての疑問が提示される。実際、「アウグスチヌス主義」という名のもとに何を考えるかであり、この点、ジルソンの主張もシュテンベルゲンの主張も、当時のドミニコ会、アウグスチヌス隠修士会、フランシスコ会の動向や当時の学者たちの見解について、十分統一的に正しい理解を提供しないことが明らかになってきている。ことにフランシスコ会の神学者たちはさま

ざまな主張をし、会から非難された者も居て、「共通の立場」を見ることは実際にはむずかしいことが簡略に示される。そしてマッキンタイアのトマス理解にも誤解があって、マッキンタイアは、トマスは愛徳なしには自然的徳もないと主張したと言っているが、これはむしろアウグスチヌスの主張であって、トマスは自然的徳が愛徳なしに成立することを認めていたことを明らかにする。

第2章では、この時期のアリストテレスに対する諸学者の態度を検討して見せてくれる。実は、この著作のなかでこの章の内容がもっともクリアで、実のあるものになっている。もっとも問題になるのはボナヴェントゥラの態度なのであるが、著者によれば、ボナヴェントゥラがアリストテレスに対して明白に批判的となっているテキストは、フランシスコ会の学院での講義と了解されること、いかなる神学者も、大学での講義に際してアリストテレスの權威に対して否定的になることはできなかったことが説得的に示される。実際、アリストテレスに対してあからさまに批判的なテキストを残しているオリヴィは、一度も大学の教壇に立つことはなかったらしい。いずれにしろボナヴェントゥラでさえ、大学人としてはアリストテレスとの一致に腐心していたのである。したがって大学人であったスコトゥスがアリストテレスの説に対して否定的であるよりも肯定的であることは、少しも驚くにあたらないことが分かる。そもそも1277年の禁令もアリストテレスに対してというより、その解釈を問題にしている。トマス説も、Giles of Rome によって苦難の末、85年に実質上非難の対象からはずされている。

第3章は 'Voluntarism' で、この作品の主題に入る。著者ケントはまずその概念を3つに区分する。一つは中世初期からあるもので、人間のなかで情緒的部分を重視する、というもの (psychological voluntarism)。第二には、意志を知性の命令に対して自由なものと見なし、倫理的責任を自由意志に帰する、というもの (ethical voluntarism)。これはボナヴェントゥラに始まりその後継者に見られる。第三は、スコトゥスやオッカムに代表されるもので、神の至高の自由を強調するもの。著者はここでは第二の倫理的自由主義を主に検討する。

この章の検討の骨組みになるのは、「意志の自由」libertas voluntatis ということが用いられるようになるのは1270年以降であること、それ以前はもっぱら「自由決定力」liberum arbitrium が問題であったこと、そしてこの自由決定が意志に基づくものか、知性に基づくものかの問題は、70年以降も続いている、ということであ

る。周知のようにトマスは自由決定を知性によるものと見なし、フランシスコ会の学者たちはこれに対して概ね意志によるものと見なした。とくにオリヴィはラディカルな主張をしたこと、意志のはたらきの原因として、意志と対象をそれぞれどのような原因と見なすかについての議論があったことが示される。

第4章ではアクラシアが問題にされる。つまり無抑制に関して、抑制力があること（悪い欲望を抑える力があること）と、節制の徳があること（悪い欲望をもたないこと）の区別がアリストテレス、トマスにおいて明確であったこと、このことと関連して理性と感覚欲求とその両者の間に位置づけられる情念が取り上げられ、意志がむしろ情念との関連のなかで考えられていることが示される。しかしキリスト教がもっている人間概念、つまり人間には悪い欲望があること（原罪による）、倫理的責任が個人の自由意志に帰せられるべきであることが、さまざまな仕方アリストテレスの理解から学者の考察を引き離していった。この章の最後ではスコトゥスがアンセルムスから受け取っている二つの性向 '*affectio commodi*' と '*affectio iustitiae*'（『個人的利益を求める性向』と『神の公正を受け取る性向』）が紹介され、アリストテレスとは人間理解の基本が異なっていることが明らかにされる。つまりスコトゥスでは、この二つの性向は意志が内部に荷なうものなのである。そして「幸福追求」と言っても、前者の性向でのそれと後者の性向でのそれとは、自ずから異なることがスコトゥスでは矛盾なく説明される。

第5章では「意志の徳」が問題にされる。アリストテレスでは周知のようにそれは「習性」として理解される。しかし一度できあがった習性を教化することはできないことになる。スコトゥスでは教化の可能性が意志の自由の主張によって守られるが、意志が徳なしに徳のある行為ができる、という問題が起こる。

最後に結論があり、簡単に全体を振り返っている。

この作品は意欲的な作品であり、その意味で教えられることも多く、評者も雲が晴れる思いを多くの箇所であらわした。しかし同時に、考察が十分整理されているとはいわたく、評論を試みようと思っても、まとまりのつかない点が多い。スコトゥスに関して、間違ったことはなにも言っていないが、そうは言っても、意味付けがはっきりしない、つまりどういう文脈で問題になっているのかが、よく分からないことが多いのである。

いずれにしろこの作品は、倫理的美徳を情念のうちに説明し、人間のうちにそれが

どのようなはたらきをするかについての心理学的分析をするアリストテレス流の倫理学が、どのように変貌し、近代の規範倫理学を生じたかを明らかにしようとする試行的研究である。著者は「意志の自由」という、アリストテレスにはなかった要素が関わっていたこと、また原罪によって悪い状態にある人間が良くなる可能性が説明されなければならないこと、等がこの変貌を引き起こした要因になっていることはたしかなことと見ている。

とは言え、評者から見て記述の混乱の原因は、まだ問題が十分に了解されていないことにある。それはトマスからスコトゥスまでの推移を見定めれば問題が見えてくるというものでもないらしい。もちろん評者自身もこのことを理解したのはこの作品を読んでみてのことであるから、この点は著者に感謝するほかないが、実際にはスコトゥスの倫理学が「規範倫理」であると解釈するには、まだ研究が不足しているように見える。

結論を言わせてもらえば、この種の研究を軌道に乗せるためにも、そもそも何が倫理学に規範性を生ずるのか、という点について、理論的考察が切にまたれる。

Ralph McInerny:
Aquinas and Analogy

Washington, D. C., The Catholic University of America Press,
1996, pp. x+169.

井 沢 清

著者は、序文にあるとおり、*The Logic of Analogy* (1961) の出版以降も、続行された研究の成果を *Studies in Analogy* (1968) にまとめた。両著は長く絶版となっていたために、再版にあたり、書き改められたものが本書である。以下、著者の論述を要約していく。

トマスのアナロギア論はカエタヌスの小著 *De nominum analogia* (1498) におけるアナロギア解釈の枠組みのもとに理解されてきた。だが、カエタヌスはその解釈を誤った。カエタヌスの誤謬を指摘し、アリストテレスにおけるアナロギアの役割、そのトマスにおける影響の程度を検討し、トマスにおける正確なアナロギア論を率直